令和４年度

小学生名寄自然体験交流事業報告書

なみすけ

名寄市観光キャラクター
「なよろう」

杉並区次世代育成基金活用事業

令和５年３月
杉並区教育委員会

目　　次

01　小学生名寄自然体験交流を終えて
杉並区教育委員会　教育長　白石　高士
名寄市教育委員会　教育長　岸　小夜子

02　小学生名寄自然体験交流事業の概要

04　名寄交流マップ

05　写真でふりかえる交流事業

09　派遣児童の作文・作品

31　令和４年度小学生名寄自然体験交流を振り返って
済美小学校　校長　難波　誠二

32　保護者の感想
令和４年度名寄市・杉並区交流事業

なよろ市立天文台「きたすばる」
令和４年12月24日

小学生名寄自然体験交流を終えて

杉並区教育委員会
教育長　白石　高士

区制施行 80 周年を記念して開始された「小学生名寄自然体験交流事業」は、交流自治体である名寄市に小学生を派遣し、90 周年を迎えた今回で 11 回目となりました。

新型コロナウイルス感染症の影響も残るなか、受入先である名寄市の皆様や、子どもたちの体調管理に万全を期してくださった保護者の皆様など、多くの方々の支えにより無事に事業を終えることができましたことに大変感謝申し上げます。

この事業は、寒さの厳しい北海道名寄市だからこそ得られる学びがあると考え、毎年 12 月に実施しています。今年は例年と比べて暖かく、パウダースノーではなかったようですが、それでも、東京ではなかなかできない雪合戦を楽しむなど、名寄市の子どもたちとの交流もさらに深まったようです。林から聞こえてくる鳥の声や一面の雪のなかでのスノーシュー、やっと見つかった木星など、子どもたちにとっては、大自然のなか初めての体験ばかりであったと思います。

子どもたちは、北国の暮らしや天文、気候など、あらかじめ学びたいテーマを決め、下調べをしたうえで名寄市へ向かいました。それを実際に体験し、考えてまとめ、自分の言葉で発表する。このことが、子どもの探求心を育み、学びにつながるものだと実感しています。学習成果発表会では、アイヌ文化のことを調べる児童、名寄市特産品のもち米やジンギスカンを調べる児童など、暮らしというテーマだけでもそれぞれが違う視点でまとめていました。自分の五感と心を使って、思い切り体験したことが十分に伝わってきて、私も今すぐにでも名寄市へ行きたい気分になりました。ぜひ、この経験を学校の友達や大人たちにも伝えていってほしいと思います。

最初の結団式では緊張した面持ちで自己紹介をしていた子どもたちも、学習成果発表会では堂々とした様子でとても頼もしく見えました。この３か月間を通じて、子どもたちはひと回りもふた回りも成長したようです。これをきっかけに、子どもたちがさらなる学びに向かって前向きに取り組んでくれることを期待しています。

最後になりましたが、本事業の実施にあたりまして、次世代育成基金の趣旨にご賛同・ご支援をいただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

名寄市教育委員会
教育長　岸　小夜子

本年度も「小学生名寄自然体験交流事業」を無事終了できましたことを大変嬉しく思います。この度も新型コロナウイルス感染症の影響を受ける中での実施となりましたが、保護者や関係の皆様には感染症対策も含めきめ細かな準備など、ご支援、ご協力を賜りましたことに心より敬意を表し、感謝を申し上げます。

参加された杉並区の児童の皆さんには、北国博物館での展示室の見学、スノーシュートレッキングや雪遊びによる名寄の児童との交流、カーリング、なよろ市立天文台きたすばるの見学など、名寄ならではの冬の自然や文化、スポーツに親しんでいただきました。

12 月下旬の名寄市は寒さが厳しく雪も多く降る時期ですが、本年度の交流事業期間中は暖かい日が続きました。野外の活動では例年以上に雪合戦が盛り上がり、杉並と名寄の児童の皆さんが楽しそうな声を上げながら笑顔で交流する様子を拝見することができました。宿泊施設の森の休暇村コテージでは、夜間の厳しい冷え込みを利用していろいろな物を凍らせる実験を行い、期待に反してあまり凍らなかったとのことでしたので、再チャレンジをしにぜひ名寄市へお越しください。また、天文台では天候に恵まれない状況でしたが、一瞬だけ木星を見ることができたと聞きました。これらの様々な活動を通じて名寄の冬を体験し、充実した３日間を過ごしていただけたのであれば嬉しい限りです。

本事業は、「杉並区次世代育成基金」を活用して、次世代を担う子どもたちが様々な体験・交流を経て、夢を描き、その夢に向かって健やかに成長できる取り組みを支援する活動と聞いております。冬の名寄市での体験・交流が、本事業の目的に少しでも寄与できますよう、今後とも受け入れに最大の努力をし、杉並区との絆を一層深めていきたいと考えております。

結びに、本事業の実施にあたりましてご尽力を賜りました関係の皆様に重ねてお礼を申し上げますとともに、参加された児童の皆さんの健やかな成長並びに杉並区と名寄市の交流や相互理解がますます深まることを祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

小学生名寄自然体験交流事業の概要

１. 目的

この事業は、杉並区次世代育成基金を活用して、交流自治体である名寄市に区内児童を派遣し、天体観測などの体験を通して自然の雄大さや大切さを学ぶとともに、名寄市の小学生との交流により、互いに尊重し合い、学びあう中で、豊かな人間性を育むことを目的としています。

２. 事業のスケジュール

令和４年　11 月 10 日（木）	結団式・第１回事前学習会・保護者説明会
11 月 20 日（日）	第２回事前学習会・インターネット交流
12 月　９日（金）	第３回事前学習会・保護者説明会
12月24 日（土）～12月26 日（月）	自然体験交流（北海道名寄市派遣）
令和５年　１月 13 日（金）	学習相談会・保護者説明会
２月　４日（土）	学習成果発表会

３．派遣児童名簿　（学習・行動班別）

班	氏名	学校名	学年
１班	山本　琥大	桃井第二小学校	６年
	鷹取　映佑	桃井第五小学校	５年
	中村　優理奈	西田小学校	５年
	長谷川　琉海	方南小学校	５年
２班	守田　櫂	沓掛小学校	６年
	大石　郷太	東田小学校	５年
	工藤　瑛里子	久我山小学校	５年
	大塚　想太郎	桃井第四小学校	５年

班	氏名	学校名	学年
３班	小幡　勇介	杉並和泉学園	５年
	岩﨑　かりん	方南小学校	６年
	唐木田　くらら	馬橋小学校	５年
	山本　悠月	桃井第四小学校	６年
４班	宇田川　慎太	西田小学校	５年
	安藤　苺乃	高井戸小学校	６年
	大隅　ちえる	和田小学校	６年
	障子　菜々子	杉並第七小学校	６年
	佐々木　隆之輔	八成小学校	６年
５班	高橋　比奈子	杉並第三小学校	５年
	飯村　桃子	馬橋小学校	５年
	石井　寿	杉並和泉学園	５年
	大澤　美空	杉並第九小学校	６年
	依田　杏里	高円寺学園	５年

４．引率者・学習指導者

對馬　初音	教育委員会教育委員（教育長職務代理者）
難波　誠二	済美小学校校長
川口　周作	天沼小学校副校長
三浦　哲	桃井第四小学校主任教諭
佐藤　友是	済美小学校主任教諭
山本　真紀子	高円寺学園主任教諭
清水　絵里佳	杉並第九小学校教諭
鈴木　壮平	済美教育センター統括指導主事

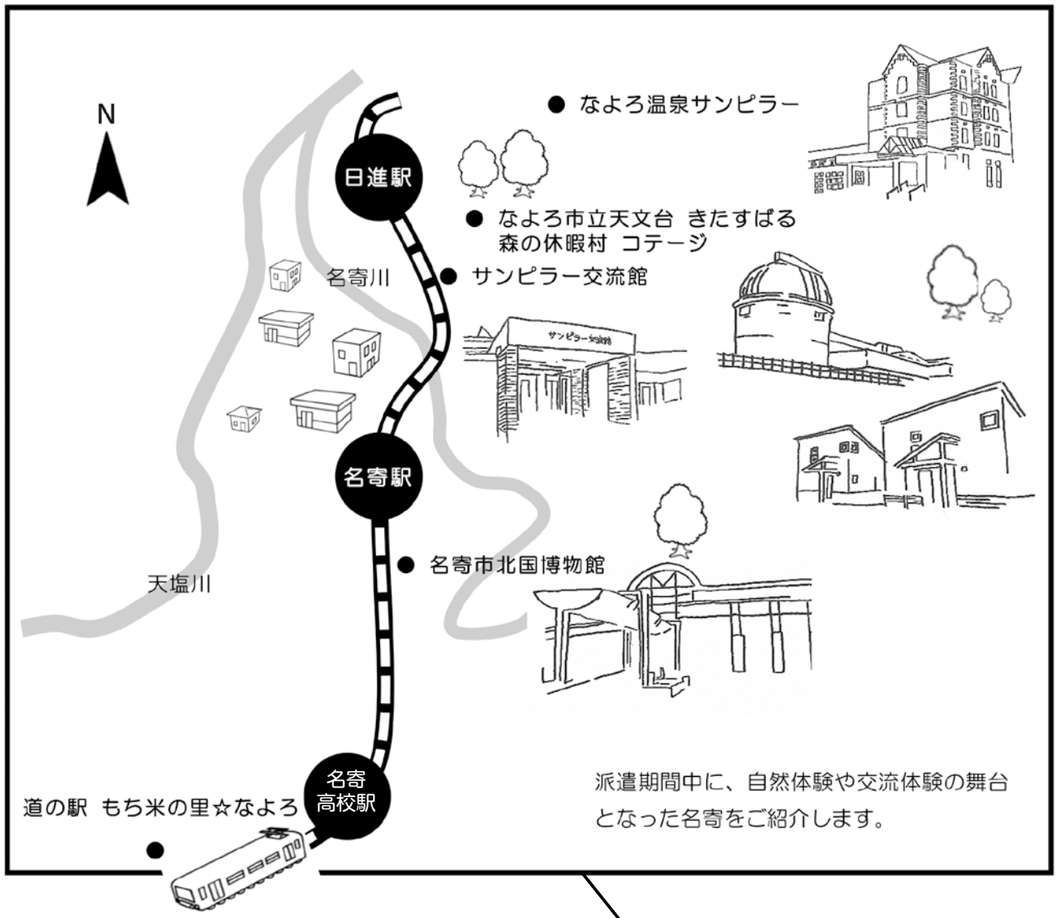
樋川　達郎	済美教育センター指導主事
本橋　宏己	生涯学習推進課長
齋藤　尚久	生涯学習推進課社会教育推進担当係長
鈴木　美貴	生涯学習推進課管理係主査
田中　幸穂	生涯学習推進課管理係主任
山口　京子	社会教育センター
鈴木　朝代	西田小学校校長（前年度引率）
小山　浩	済美教育センター理科教育指導担当

※ほか　看護師１名

小学生名寄自然体験交流事業（令和４年度）行程表

	１日目 [12月24 日（土）]		２日目 [12月25 日（日）]		３日目 [12月26 日（月）]	
時間	晴れ時々雪	最高気温　2.0℃ 最低気温　－ 1.5℃	晴れ時々雪	最高気温　0.7℃ 最低気温　－ 3.4℃	晴れ時々雪	最高気温　1.7℃ 最低気温　－ 1.4℃
6			6:00	起床	6:00	起床
7	7:30 7:45	児童集合 出発式	7:00 7:10	休暇村コテージ発 なよろ温泉サンピラー着（朝食）	7:00 7:10	休暇村コテージ発 なよろ温泉サンピラー着（朝食）
8	8:00	杉並区役所発	8:15 8:30	なよろ温泉サンピラー発 北国博物館着	8:15 8:25 8:55	見送り式 なよろ温泉サンピラー発 もち米の里☆なよろ着
9				博物館見学	9:15	もち米の里☆なよろ発
10	10:15 11:00	羽田空港着 羽田空港発（JAL553 便）	10:00	対面式 スノーシュートレッキング＆宝探し	10:35	旭山動物園着 グループ行動
11		昼食（機内）				
12	12:40	旭川空港着	12:15	昼食		昼食（園内）
13	13:30	旭川空港発		雪あそび		
14			14:00 14:15 14:30	名寄児童とお別れ式 北国博物館発 サンピラー交流館着	14:30	旭山動物園発
15	15:40	森の休暇村コテージ着		カーリング	15:00	旭川空港着
16	16:15 16:20	休暇村コテージ発 きたすばる着 天体観測	16:30	サンピラー交流館発	16:40	旭川空港発（JAL556 便）
17	17:20 17:30	きたすばる発 なよろ温泉サンピラー着 入浴	17:00	きたすばる着 プラネタリウム鑑賞		
18	18:30	夕食	18:20 18:30	きたすばる発 なよろ温泉サンピラー着 入浴	18:05 18:40	羽田空港着 羽田空港発
19	19:10 19:20	なよろ温泉サンピラー発 休暇村コテージ着	19:30	夕食	20:15	杉並区役所着
20		アイスクリーム作り	20:10 20:20	なよろ温泉サンピラー発 休暇村コテージ着	20:30	解散
21	21:00	就寝	21:00	天体観測 就寝		

名寄 交流マップ



名寄市公式サイト

結団式・第１回事前学習会 令和４年11月10日(木)

この日が初めての顔合わせ。自己紹介などを通じて一緒に学ぶ仲間や先生と交流を図り、名寄の気候や農作物、文化、歴史など様々なことを学びます。

第２回事前学習会 令和４年11月20日(日)

名寄についてより深く知るため、交流事業に参加した先輩方の発表やお話を聞きました。また、インターネットを通じ、名寄市職員の皆さんから「北国博物館」や天文台「きたすばる」についてのお話を聞いたり、名寄市の児童とご当地クイズ大会をするなど交流を深めました。

第３回事前学習会 令和４年12月９日(金)

学習課題の解決に向けて、自ら考え仲間と共有します。また、グループで旭山動物園での行動計画を立てます。

名寄派遣　第１日目　令和４年12月24日(土)

区役所での出発式のあとは、早速、北海道名寄市へ向かいます。これからの３日間では、名寄の皆さんに話を聞いたり、観察・調査・実験をするなどして、事前に決めた学習課題について解決に取り組みます。

きたすばるで天体観測

天文台「きたすばる」の屋上観測室では、雲の切れ間から、木星とその衛星を観測することができました。また、光学赤外線天体望遠鏡「ピリカ」を前に望遠鏡の仕組みを学びました。

夕食・アイスクリーム作り

夕食後は、クリスマスのお話を聞いたり、アイスクリーム作りに挑戦しました。

名寄派遣　第２日目　令和４年12月25日(日)

北国博物館での調べ学習

北国博物館では、「名寄の気候・地形・動植物」や、「大昔から現在までの人々の生活」などについて、北国博物館職員の皆さんから学びました。

対面式・スノートレッキング・雪あそび

名寄市児童との対面式・交流タイムを行った後は、スノーシュートレッキングへ。深く積もった雪をかき分けながら、真っ白な平原を歩きました。また、雪合戦などを通じて、杉並と名寄の児童の仲は、より一層深まりました。

カーリング体験・プラネタリウム鑑賞

サンピラー交流館では、初めてのカーリング体験。コーチの丁寧な指導のもと、最後には簡単なゲームも楽しみました。

たくさん体を動かした後は、天文台「きたすばる」に移動。プラネタリウムを鑑賞し、名寄の星空について学びました。

名寄派遣　第３日目　令和４年12月26日(月)

北国博物館長をはじめ、お世話になった名寄の方々が見送りに来てくださり、名寄市を出発する私たちに温かな言葉をくださいました。
途中、道の駅でお土産の買い物をし、旭山動物園へ向かいました。旭山動物園では、学習・行動班ごとに自分たちで考えたルートで行動し、見学をしました。

見送り式

旭山動物園でのグループ行動

到着式

学習成果発表会　令和５年２月４日(土)

今回の交流事業を通して学んだこと、感じたことなどを、一人ひとりの児童が作品や作文にまとめステージの上で発表を行いました。

派遣児童の作文・作品

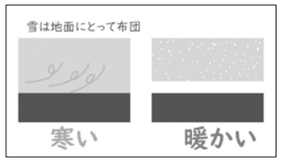
学校名	桃井第二小学校	氏　名	山本　琥大

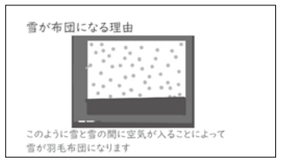
1班

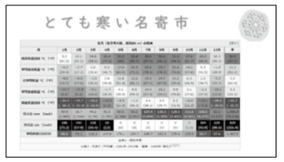
令和四年度名寄市自然交流会報告

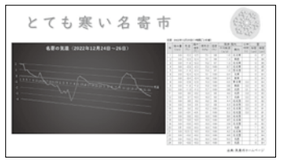
僕はこのたび、名寄市自然交流会に参加して雪と寒さについて調べてきました。まず一つ目は、名寄市の雪についてです。今回はサラサラではありませんでしたが、実際は雪玉が作れないほどサラサラな雪が降るそうです。他にもスノーシュートレッキングの時にガイドさんが「雪は土にとって布団みたいなもの」とおっしゃっていましたが、僕は本当なのかなと思ったので試しに雪に埋もれてみると思ったより冷たくなく、確かに布団みたいだなと思いました。なぜ雪が布団みたいになるのかなと思い、ガイドさんにお聞きしたところ、「雪はほとんど熱を通さないし、しかも雪と雪の間に空気が入っているから」と答えてくれました。

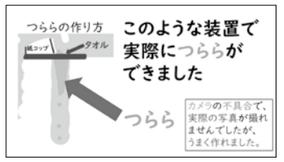
二つ目は、寒さについてです。名寄市ではこれまでにマイナス 35.7 度にもなったことがあるそうです。ぼくたちが名寄に着いた 24 日の午前０時の気温は 0.9 度でした。ここから上がると思いましたが、12 時には逆に０度まで下がっていました。翌 25 日の午前０時の気温はマイナス 1.5 度で、やっとマイナス１度切ったという喜びがありました。そして、午前７時にようやくマイナス 3.4 度まで下がりました。このままもっと気温が下がるかなと期待しましたが、日中は気温が上がり午後３時には 0.7 度まで上がりました。次の日は熱が出てしまって計れませんでしたが、気象庁のホームページで調べてみましたら、26 日の午前０時の気温は 0.3 度で、滞在中にはマイナス１度以下にはなりませんでした。したがって、今回の滞在中の最低気温は、25 日午前７時の気温、マイナス 3.4 度でした。名寄市では、太陽が出るとプラスになり、曇ると気温がぐっと下がることがわかりました。

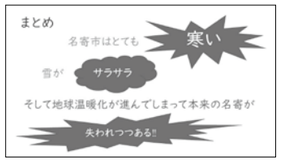


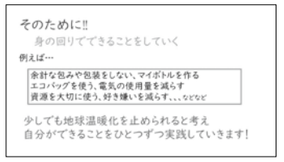












また、気温がマイナスまで下がることを利用して、水で湿らせたタオルの上に、水を入れた紙コップを少しずつ水が流れ落ちるようにおいた装置で、ツララ作りに挑戦しました。結果は成功、うまく作ることができました。今までここまで寒いところに来たことがなかったので、とても驚きました。

最後になりますが、名寄市自然交流会でたくさんのことを学びました。話を聞いたり、展示物を見たりした中で、気になったことがありました。それは異常気象です。本来、名寄市はこの季節になると必ずと言ってもいいほどマイナス２度ぐらいになり、雪ももっとサラサラな雪が降るそうです。しかし、今回の滞在中に触った雪は、雪玉が作れる湿った雪でしたし、先に述べたように、気温もプラスになっていました。名寄市にも地球温暖化の影響が表れているのだと感じました。

名寄の素晴らしい自然を未来に残すために、まず自分の身の回りのことから考え直そうと思いました。

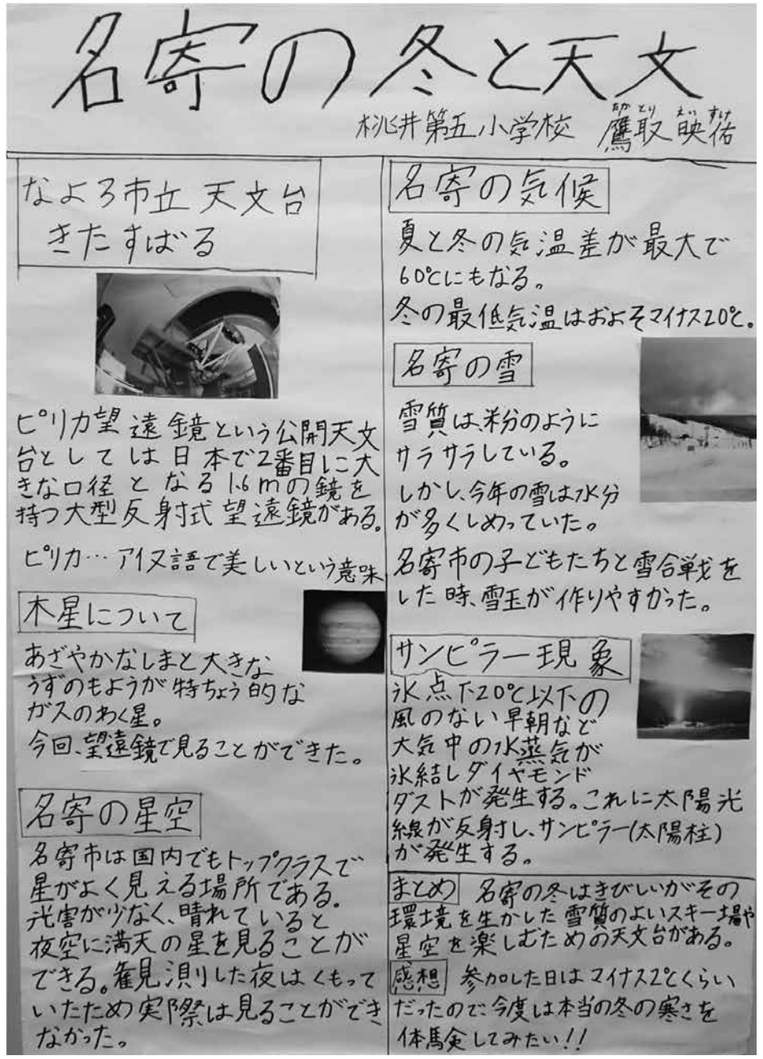
1班

学校名	桃井第五小学校	氏　名	鷹取　映佑

名寄の冬と天文

ぼくは、天文や名寄の冬について学びたいと思ってこの交流事業に参加しました。

一つ目は天文についてです。きたすばるでは望遠鏡について学びました。ピリカ望遠鏡は中に 1.6 mくらいの鏡が入っていることを話してくれました。また人間の目のおよそ 600 倍見えるということについても話してくれて、とてもおどろきました。とても大きな望遠鏡だともっと遠くまで見えることがわかりました。でも当日は空がくもっていて星があまり見えませんでした。けれども、木星は見えたのでよかったなと思いました。次に日食について話を聞きました。今度は 2030 年の６月１日におこるそうです。ぼくはこの日にぜひ行ってみたいなと思いました。それからプラネタリウムで星座について学びました。冬に名寄で見える星座がたくさんありました。東京でも星と星を線でむすびたいなと思いました。特にぼくが見たかった星座は、オリオン座と小犬座です。空がくもっていない時に行ってみたいです。



二つ目は名寄の冬についてです。名寄でふっている雪はさらさらなため、雪玉がつくれないかと思っていました。しかし、今年の雪は東京でよくふるようなしめった雪だったので雪玉をつくることができました。名寄の子どもたちとたくさん雪遊びができたので楽しかったです。また名寄の子どもたちと仲よくしてたくさん遊べたらいいなと思っています。気温もマイナス 10℃くらいになるかと思ったけれども、そんなに寒くなかったのでとても寒い日に行ってみたいなと思いました。

ぼくはこの交流事業で学んだことを生かして、これからも勉強に今まで以上に取り組みたいです。

学校名	西田小学校	氏　名	中村　優理奈

1班

名寄新聞

私は、星を見たいと思い、名寄自然体験したのですが、残念ながら雪が降って天候が荒れてしまってあまり見ることが出来なかったのでいろいろな体験を通して感じたことを話そうと思います。

まず最初は「きたすばる」でここは、私が一番楽しみにしていた天体観測所です。ここでは「ピリカ望遠鏡」という名前の望遠鏡で星を見ました。「ピリカ」という名前はアイヌ語で「美しい」という意味なのだそうです。しかし、残念ながら天候が悪く火星と衛星と土星しか見ることができませんでしたが、衛星は東京ではなかなか見ることができないので、観測できて良かったです。

次は「北国博物館」で、ここでは「北国に住んでいる人たちの暮らし」や「アイヌ」のことについて学びました。そして、特に一番印象的だったのが「アイヌ民族が使っていた道具」で、昔のものなのでさびてしまっていると思ったら、きれいに保管されていたので、びっくりしました。他にも「どうして寒冷、大雪なのか」を簡単に説明しているコーナーがあって勉強になりました。そして最後に外で名寄市に住んでいるお子さんたちと雪合戦をしました。名寄市のお子さんたちは、雪玉を作るのがとても早くて上手でした。

次は「スノーシュートレッキング」で、ここでは、雪がつもっている林を通る予定だったのですが、林のコンディションが悪く、雪がたくさん積もっていて深いところをスノーシューをつけて歩きました。そこでは、スノーシュートレッキングだけでなく「宝探し」もしました。そして宝箱を見つけた時、中にはたくさんのお菓子が入っていたのでとても嬉しかったです。

次は「カーリング」で、ここでは名寄のお兄さんに「カーリングの基本的な動作」を優しく教えてもらいました。その後に、試合を２回しました。１回目は勝って、２回目では負けてしまいましたが、オリンピックでカーリングを見てやってみたいと思っていたので、１回でも勝つことができたので良かったです。

最後は、天体観測の次に楽しみにしていた旭山動物園です。今まで、いろいろな動物園に行きましたが、目の前で「ペンギンの大行列」を見たことがなかったので、見た時は感動しました。

私は、今回、初めて北海道に行ったのですが、見る物すべてが驚きの連続でした。自然の美しさ、雪の感触、アイヌ文化、名寄のお子さんたちとの交流、どれを取っても一生忘れられない宝物になりました。今日学んだことを忘れずに、これからも、いろいろなことに興味を持って取り組む姿勢を続けて行きたいです。

1班

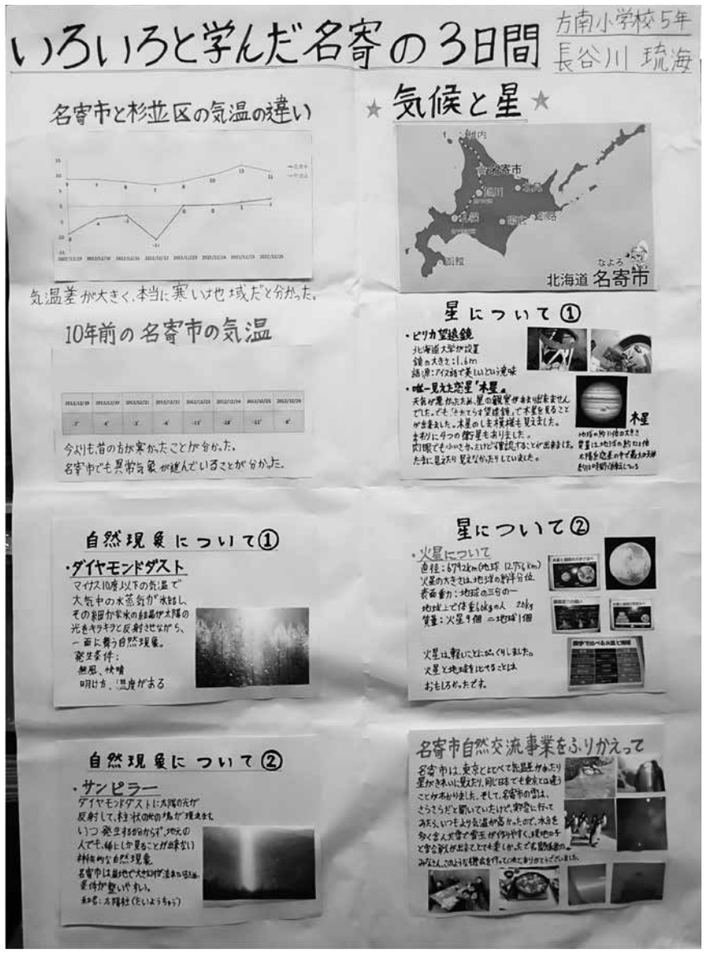
学校名	方南小学校	氏　名	長谷川　琉海

いろいろと学んだ名寄の３日間

ぼくが、名寄自然体験交流で学んだ事は気候と星です。一つ目は、気候についてです。名寄市と杉並区の気温を比べました。名寄市に行った12月24日正午の気温は－７度。杉並区＋10度。寒い地域だと思っていたが、本当に寒いと実感しました。名寄市の 10 年前の気温と比べてみると、同日同時間の気温は－18 度。思ったより気温が上昇していて異常気象が進んでいる事が分かりました。

自然現象についても学びました。－ 10 度以下で大気中の水蒸気が氷結し、その細かな氷の結晶が太陽の光を反射させながら一面に舞う現象をダイヤモンドダストと言います。ダイヤモンドダストが太陽の光に反射した柱状の光をサンピラーと言います。これらの現象は、いつ発生するか分かりません。地元の人でも、稀にしか見ることの出来ない神秘的な現象です。ぼくも絶対に見てみたいと思いました。

二つ目は、星についてです。きたすばる天文台のピリカ望遠鏡は、北海道大学の人によって作られました。鏡の大きさは 1.6 mです。ピリカの語源は、アイヌ語で美しいということです。ぼくは、この体験で星について学びたかったのですが、天気が悪く星をあまり見ることが出来ず残念でした。でも、きたてらす望遠鏡で木星を見ることが出来ました。少しぼやけて見えづらかったけど、しま模様が見えました。木星の周りに四つの衛星も見えて嬉しかったです。そして、天文台の中で火星について展示があり、学ぶことが出来ました。火星９個と地球１個の質量は、同じです。火星は、とても軽いことにびっくりしました。



名寄自然体験交流をふりかえって、気温差があったり、星が東京よりきれいに見えたり、東京とは違う事が分かりました。そして、名寄市の雪はさらさらと聞いてたけど、実際に行ってみたら、いつもより気温が高かったので、水分を多く含んだ雪だから雪玉が作りやすく、現地の子と雪合戦が出来て、とても楽しかったです。

ぼくは、この事業のおかげで成長することが出来たと思います。関係者の皆さん本当にありがとうございました。

2班

学校名	沓掛小学校	氏　名	守田　櫂

名寄ならではの貴重な体験

ぼくは今回の小学生名寄自然体験交流に応募する前に、学校の図書室で紹介されていた「あさひやま動物記」という本を読んだことがありました。この本の著者は獣医師として長年、動物の世話をしてきた小菅前園長です。閉園の危機にあった旭山動物園が行動展示など新しいアイデアで入場者数日本トップになるまでの話や野生動物を飼育することの大変さなどが書かれています。今回、実際に旭山動物園に行けると知りとてもワクワクしました。

自然体験交流で２日目に行った北国博物館では、アイヌ民族についてや、名寄市の歴史についての展示がありました。ぼくは、展示の一つの、「カムイの森」というコーナーが印象的でした。そこには、北国の動物たちの模型があり、どれもとてもリアルで、今にも動きだしそうでした。そして、北海道の先住民であるアイヌの人々が動物の毛皮で服を作ったり、動物のきばで儀式の道具を作ったり、全ての物に神様が宿っている、という考えをもっているということを学び、アイヌ民族が動物を生活のために利用するだけでなく大切に思っていたことを学びました。

３日目に行った旭山動物園では、実際に見学を始めても、想像以上に園内が広く、時間内に全てを回ることはできませんでした。一番印象に残ったのは、旭川という寒い地域ならではの展示です。例えばペンギンの散歩では、コース内をたくさんのペンギン達がゆっくり歩いていてとてもかわいかったです。そして、マヌルネコやシロフクロウ、エゾシカ、キタキツネなどは寒い地域にしかいない動物で、ぼくは初めて見ました。特にエゾシカやエゾヒグマ、エゾユキウサギなどの名前にある、「エゾ」という言葉は、アイヌ語に由来するので、これらは、北海道特有の動物である、ということが分かります。前日に行った北国博物館でアイヌ民族について学んだ後だったので、これらの動物達と共に生きてきたのかもしれないと思うととても感動しました。東京の動物園でも、ホッキョクグマなどの寒い地域の動物たちも見られますが、暖かい東京では、冷やした部屋の中で展示されています。しかし、旭山動物園は、とても寒い所にあるので、屋外に、とても自然に近くイキイキとした姿で展示されていました。名寄の大自然を体感した後だったので、「動物たちはこんな環境で暮らしているのかな」と想像できて、とても感動しました。

今回の体験では大勢の方々のご協力のもと、とても貴重な経験ができました。学習班や生活班の仲間たちとも、初めて会ったのにとても仲良くなれました。全ての皆さん、ありがとうございました。

学校名	東田小学校	氏　名	大石　郷太

北海道で生きていく動物たち

ぼくが発表したいのは、名寄の自然の中で見たエゾリスなどの寒さに強い動物たちの生態についてです。

ぼくが住む冬の杉並の平均気温は４度から７度、氷点下を下まわることはあまりありません。

北海道名寄市での、冬の平均気温は－９度、１月から２月には－15度を下回る日も多く積雪量と雪質は日本トップクラスです。ちなみに冷ぞう庫の温度は２度から５度。また冬場の気温が氷点下４℃以下になると水道はとうけつします。このことから名寄の寒さがいかに強れつかがわかります。

では北海道でも生きられる植物をしょうかいします。せいようタンポポは北海道でも生きられる植物です。氷点下になると細胞の外のかべをこおらせて内部が凍りにくくなっています。そして細胞内の水をへらして寒さにそなえています。

では動物は？

クマは冬の準備の為に秋からたくさん食べます。そして冬みんします。春がくるまで３～４ケ月何も食べず何ものまず排せつもしません。

エゾリスは冬にそなえて秋になると森の色々なところに木の実をうめます。

エゾシカはとても低ねんぴな動物です。ササや落ち葉、じゅひなどをたべ冬をしのぎます。

では北海道を代表してエゾリスさんの冬対策について比べてみました。

杉並代表は、ぼくの愛犬。杉並在住のトイプードルのトムちゃんにお願いします。

ぼくの愛犬トムちゃんはいつもだんぼうのついた部屋でねています。外の散歩も雨か雪の日は服を着ます。

エゾリスさんは、夏毛と冬毛のころもがえをします（これをダブルコートといいます）。夏の毛は密度も少なく冬の３分の１程の体形にみえます。

トイプードルは毛がシングルコートといい一そうしかはえていません。

エゾリスさんは寒さをしのぐため冬は耳の毛までこくなり暖かくなるとぬけてきます。エゾリスさんはすごい!!エゾリスさんはふさふさなので冬に強いです。エゾリスさんは冬眠しません。

エゾリスさんは特殊のう力をもっています。積もった雪の上から木の実のある場所をピタリとあてる事ができます。でもたまに木の実をかくした場所を忘れることもあります。このおかげで木は種を地中にうめてもらい芽をだすことができるのです。

ぼくは名寄の動物を調べてみて色々な地いきにてきおうできるようにしていて、おもしろいなと思いました。

学校名	久我山小学校	氏　名	工藤　瑛里子

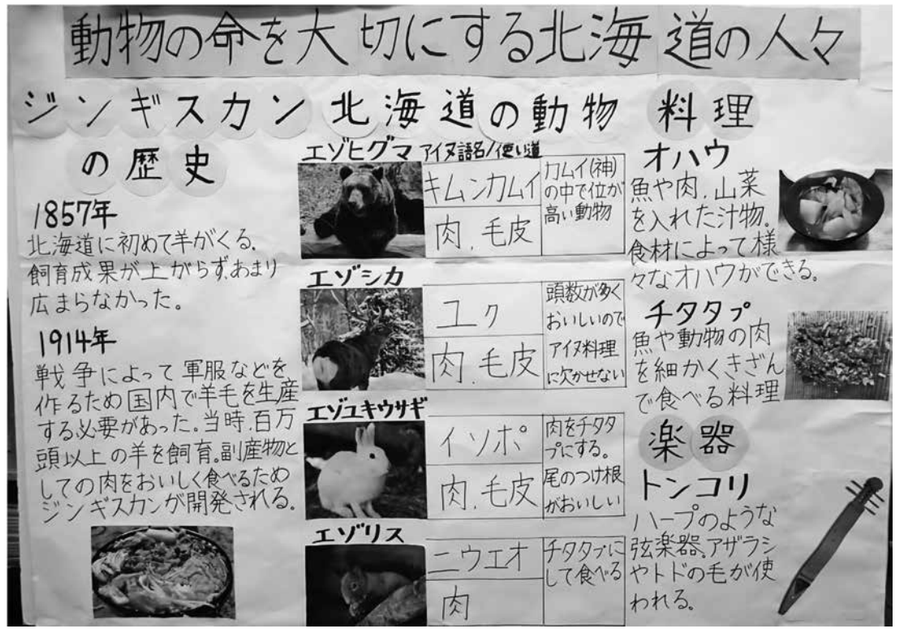
動物の命を大切にする北海道の人々

私は、今回名寄へ行って東京ではできない体験をたくさんし、名寄の魅力を感じました。今日はそんな名寄の魅力の中でも私が興味をもち、調べたこと２つを発表します。テーマは食文化と動物についてです。

私はとても食べることが好きで、今回煮こみジンギスカンを食べることも楽しみの１つでした。羊肉は、思っていたほどにおいも気にならず、とてもおいしくて体が温まりました。帰宅して、家でもう一度煮こみジンギスカンを食べたいと母に話したところ、東京ではあまり食べる習慣がないと気付きました。そこでなぜ名寄では羊肉を食べるのだろうと思い、その背景を調べてみました。北海道に初めて羊がやってきたのは 1857 年、当時は飼育成果があがらずあまり広まりませんでした。しかし 1914 年、戦争によってそれまで輸入に頼っていた羊毛を国内で生産することになり、軍服などに使うために 100 万頭を超える羊が飼われるようになりました。その副産物として大量の羊肉が得られたためおいしく食べる料理法として開発されたのがジンギスカンだったそうです。

また、旭山動物園では多くの北海道固有の動物をみました。北海道の大地で生きる動物が野生で生きている姿を想像した時、昔から北海道に住むアイヌの人々と動物の関わりに興味をもちました。狩りや漁を中心にした生活をしていたアイヌの人々は、動植物を人間に恵みを与えてくれるもの、神（カムイ）として尊重していました。その中で動物で位が高いのは、ヒグマ（キムンカムイ）、シマフクロウ（コタンコロカムイ）、オオカミ（オンルプシカムイ）です。食料としては、ヒグマ、シカ、ウサギ、エゾリスがオハウという汁物やチタタプというミンチ状の料理として食されていました。また、クマやシカなどの毛皮は衣服の素材として使われたり、シカやトナカイの足のスジを使って弦が作られ、動物の皮を使って楽器が作られたりしました。

私は、名寄へ行って、北海道の人々が動物の命を尊重して、生き物の命を無だにせず命を大切にあつかっていることを学びました。命に対する北海道の人々の行動や大切にする気持ちに感動しました。



2班

学校名	桃井第四小学校	氏　名	大塚　想太郎

名寄町のような雪国にいる生き物

僕はもともと自然が大好きで、動物や虫などに興味があります。名寄市のような雪深い気候の所ではどんな生き物がいるのか、そしてそこで動物達が食べられる物は見つかるのか、できれば実際に見てみたいと思い参加しました。

たとえば、エゾヒグマは地面をほったり、木の下や洞窟の穴の中にエサをつめこんで冬眠します。しかし冬眠にむけてエサがたりなかったのかもしれませんが夏に僕たちが宿泊したコテージのそばにクマがでたこともあるそうです。

次にシロハラゴジュウカラです。ケヤキ等の落葉広葉樹の大木がある林を好んで暮らしていて、一羽かペアで生活するものが多いです。またシジュウカラ科の鳥と一緒に行動するものもいるそうです。全長は 13.5㎝。主な食べ物は昆虫ですが冬になると昆虫がいなくなってしまうので種子も食べるそうです。北国博物館で自由時間の時、先生に「鳥のエサ台があるよ、見に行ってみる？」と言われ、友達と一緒に行ってみました。すると白っぽいかわいらしいシロハラゴジュウカラと思われる鳥がきてくれエサの種子を食べていました。

名寄市北国博物館で調べたところ、この他にも雪国にはたくさんの生物がいることが分かりました。

このように雪国の環境の中にも、生き物はいて、エサは秋のうちにたくわえたり木の皮などを食べたりしてがんばって生きようとする姿に僕は感動しました。

こんなに名寄市では自然がいっぱいなのに僕が今回調べた動物の中には絶滅危惧種がいくつもありました。地球温暖化も原因のひとつなのでしょうか？ 確かに僕達が名寄市にいる間は地元の人が異常気象だというほどあたたかかったです。絶滅危惧種が増えてきているのなら何らかの方法で保護して繁殖できればなと思います。

3班

学校名	杉並和泉学園	氏　名	小幡　勇介

名寄の自然とキマロキ

「わぁ、フカフカだ～」名寄の雪をはじめて足でふんだ感触がとても心地よかったです。名寄の雪は雪質日本一と呼ばれていて、そのやわらかさから粉雪をこえて絹雪と呼ばれているそうです。なので降りたての雪は雪玉が作れなくてびっくりしました。スノーシューの時もふかふか過ぎてなんども転んでしまいました。自分で持っていった温度計を見ると常に－２℃とか －３℃でとても寒いのに現地の人は異常気象でいつもより暑いそうです。また、寒い地域ならではの実験も行いました。水に濡らしたタオルを一晩中放置しました。次の日見たら、ガッチガチになってびくともしませんでした。

雪が降り積もる極寒でも鳥たちは活動していました。シマエナガを見るつもりでしたが、今回は見れませんでした。でもゴジュウカラという鳥やあの野生のオオワシを見ることが出来てうれしかったです。オオワシは東京では見ることが出来ないし、北海道でもめずらしいので本当に良かったです。しかし、そんなオオワシやその仲間が今、危機にさらされていると聞きました。猟師が鉛球でシカなどを殺したまま放置したものをオオワシが食べると鉛が体の中に入って病気になってしまうそうです。そのためか、オオワシの数が減っているそうです。今はもう鉛球を使うのは禁止されているのですが残念です。

他にキマロキや名寄の鉄道を見れたことに感動しました。キマロキは昔、走っていた雪かき列車のことです。名寄は昔から鉄道と関わりの深い町で、宗谷本線だけでなく、昔は名寄本線、深名線の分岐点として人々のくらしや産業の発展に大きくこうけんして来ました。しかし、宗谷本線の名寄駅から稚内駅が無くなってしまう可能性もあるので少しでも何か支えんをしていつまでも名寄駅が残ってほしいと心から思います。

この３日間は僕の宝物です。かかわっている全ての人に感謝します。

学校名	方南小学校	氏　名	岩﨑　かりん

旭山動物園で学ぶ動物と人間の関わりについて

小学生名寄自然交流事業に参加して私が一番興味を持ったのは旭山動物園です。旭山動物園には約百十一種類の動物がいて、その中にはホッキョクギツネやアメリカミンクという旭山動物園でしか見れない動物もいました。私が様々な動物達の中で気になったのはホッキョクグマとキタキツネとシンリンオオカミです。

ホッキョクグマは唯一の海洋性のクマで、他種のクマなどに比べて体が長く、泳ぐのに適した流線型をしています。北極の氷はとげとげしているため、足の裏の保護の役割として毛が生えています。またすべり止め､低温から足を守るといった役割もあるそうです。白くてもふもふしていて可愛いかったです。

キタキツネは現在でも北海道では身近な動物で、昔から人間との関わりが強く、各地の民話や説話にもよく登場する動物です。とても愛嬌のある表情でいて、私達が見た時は大人しくじっとしていました。

シンリンオオカミは群れを作り、その群れには順位制があって最上位の雌雄のペアとなります。通常群れは、雌雄のペアとその子供たちで構成されます。繁殖して生まれた赤ちゃんは、群れの子供たちも協力して育てていくそうです。目がきりっとしていてかっこよかったし、ふわふわな毛並みは犬にも似ていて可愛くもありました。

沢山動物たちを見て癒される一方で、ホッキョクグマは地球温暖化の影響で絶滅の危機を迎えていることや、オオカミは、家畜を襲う害獣として殺され日本では絶滅している悲しい現実も知りました。森を切り開いたり、海を埋め立てる、資源を求め使い捨てるなど人間の我儘な行動で動物たちの命を奪ってしまっていることが残念でなりません。今まではあまり真剣に考えたことがなかったけど、私にできることがないか向き合っていきたいです。そういうほんの少しの温かい気持ちを皆が持てばいい方向に変わっていくんじゃないかと信じて行動していきたいです。

学校名	馬橋小学校	氏　名	唐木田　くらら

寒い地方の動物

私が名寄体験学習の発表テーマを「北海道のキタキツネと他地域のキツネのちがい」に決めた理由は二つあります。

一つ目は名寄市の北国博物館での展示です。寒冷地の人々の暮らしと自然や動物との関係は、とても印象に残りました。

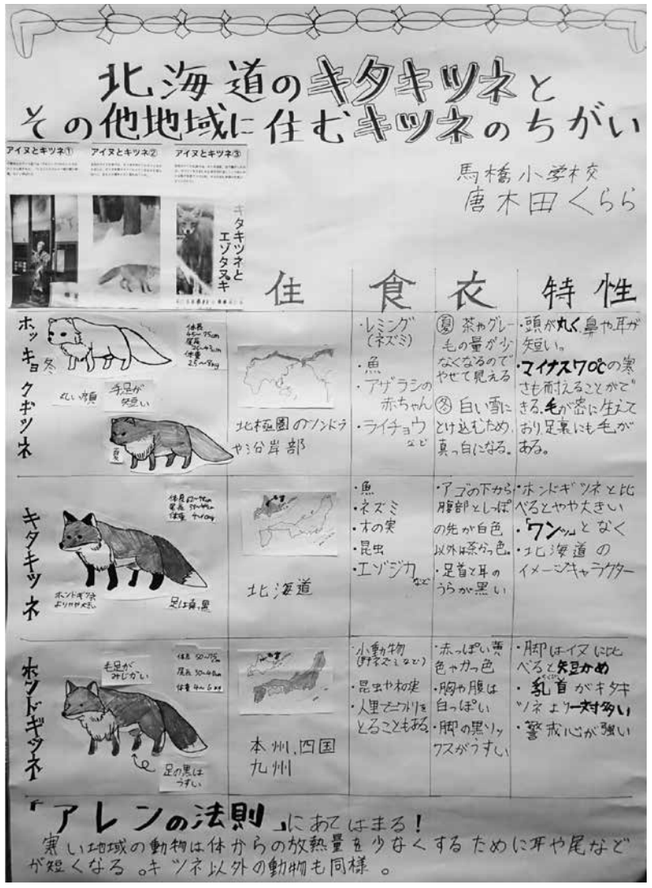
二つ目は、最終日に行った旭山動物園のテーマ「行動展示」がとてもとくちょう的だったことです。ペンギンが雪道を散歩したり、飼育員さんの手書きの説明書きなど、他の動物園で見たことはありませんでした。

園で見た動物たちの中でいちばん印象に残ったホッキョクギツネと、本州のホンドギツネ、北海道のキタキツネを比べながら、3種類のキツネの衣食住のちがいについて調べました。

まずは「住」の生息地についてです。

ホッキョクギツネはロシアやアラスカ、グリーンランドそしてアイスランドなど極寒の地に住んでいます。－70℃でも「ちょっと寒いな」ぐらいの感じだそうです。

キタキツネは北海道、国後島、択捉島、最近では埼玉や千葉にもいるそうです。ホンドギツネは本州、四国、九州に生息しています。沖縄にはキツネがいないようです。



次はキツネの「衣」、毛のモフモフ具合を比べてみましょう。

ホッキョクギツネはスーパーモッフモフ、キタキツネはモッフモフ、ホンドギツネはモフモフという感じです。ホッキョクギツネの毛は夏と冬で生え変わり、寒い地域に暮らすキツネほど毛が長くなります。長い毛の間に「下毛」が生えており、それが密になるほど体温を保つことができます。

最後にキツネたちの「食」をみてみましょう。

ホッキョクギツネは冬はライチョウやトナカイ、夏は寒冷地に住むタビネズミを捉えて食べるようです。キタキツネは肉好きな雑食で、春はネズミやエゾジカ、夏はカブトムシなどの昆虫、秋はコクワやヤマブドウなどの木の実やサケ、マスなどなかなかのグルメです。ホンドギツネもほぼ同じ。街に住むキツネはゴミをあさったり、家庭菜園の植物を荒らしてしまうこともあります。

学校名	桃井第四小学校	氏　名	山本　悠月

北海道固有の動物を調べてみた！

　私は動物が好きなので北海道固有の動物のことについて本や名寄自然体験交流で行った旭山動物園などで調べました。代表的な動物に、エゾヒグマ、エゾリス、キタキツネ、エゾシカなどがいます。エゾとは、アイヌ語で北海道を意味するそうです。今日はその中の一部を発表したいと思います。

　まずなぜ北海道と本州で住んでいる動物が異なるのかは北海道と青森県の間には津軽海峡があります。ここはブラキストン線という動物の分布境界線となっています。津軽海峡は水深が深く大陸からきた動物は本州へ渡ることができなかったのです。そのため北海道の種と本州以南の種には大きなちがいが見られます。

　１つ目にエゾヒグマについて紹介します。北海道の森林や原野に生息する日本最大の陸上動物です。しかし、生息域の減少と環境の悪化によりすい退がけ念されています。

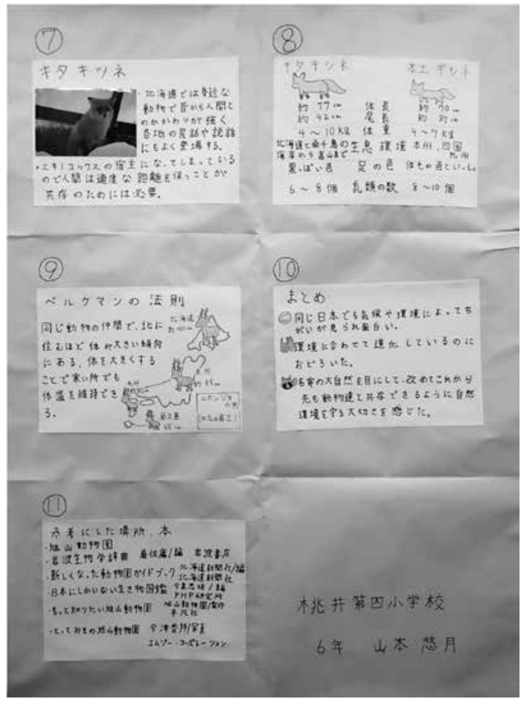
　次にエゾヒグマとツキノワグマのちがいについて調べました。エゾヒグマの方が大きいです。また子育ての期間も１年ちかくちがうと分かりました。

　２つ目にキタキツネについて紹介します。北海道では身近な動物で、昔から人間とのかかわりが強く各地の民話や説話にもよく登場する動物です。とてもかわいいですが、エキノコックスという寄生虫の宿主になってしまっているので人間はえづけしない、ゴミ出しのマナーや手洗いのてっ底など適度な距離を保つことが共存のためには必要です。

　次にキタキツネと本土キツネのちがいを調べました。キタキツネの方が大きく、足が黒いのが特ちょうです。また乳頭の数のちがいも見られました。

　今回、北海道固有の動物を調べてみて、シカ、ウサギ、リスなども北海道の種の方が本州以南の種よりも大きいことが分かりました。これはベルクマンの法則にあてはまります。ベルクマンの法則とは同じ動物の仲間で、北に住む動物ほど体が大きい傾向にあるという法則です。体を大きくすることで寒い所でも体温を維持できます。

　同じ日本でも気候や環境によってちがいが見られ面白いと思います。また環境に合わせて進化しているのにおどろきました。名寄に行き、大自然を目にして、改めてこれから先も動物達と共存できるように自然環境を守る大切さを感じました。



学校名	西田小学校	氏　名	宇田川　慎太

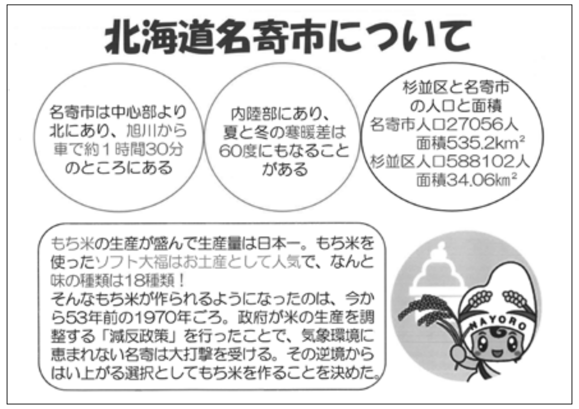
名寄の自然と文化

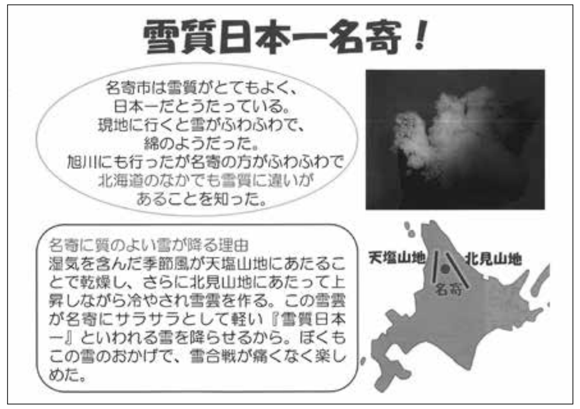
　皆さんは名寄という都市を知っていますか。名寄市は北海道の中心部より北にある町です。内陸部なので夏は暑く、冬は寒い気候なので一年の間で寒暖差が 60 度になることもあります。そんな名寄で盛んなことはもち米の生産です。もち米が作られるようになったのは今から 53 年前の 1970 年のころです。政府が米の生産を調節する減反政策を行ったことで、気象環境に恵まれない名寄は大打撃を受けました。その逆境からはい上がる選択としてもち米をつくることを決めました。ぼくは名寄産のもち米を使った人気なお土産の、ソフト大福を買いました。とてもおいしかったです。

　名寄に着いてぼくが最初に感じたことは、雪がふわふわで綿のようだったということです。旭川にも行きましたが、名寄のほうがふわふわで北海道の中でも雪質にちがいがあることを知りました。では、なぜ名寄では雪質のよい雪が降るのでしょうか。湿気を含んだ季節風が名寄市の北西にある天塩山地にあたることで乾燥し、さらに名寄市の北東にある北見山地にあたることで上昇しながら冷やされます。これが雪雲となることで名寄にサラサラとして軽い、『雪質日本一』と言われる雪を降らせるからです。この質のよい雪で、雪合戦をしましたが、あたっても痛くなくとても楽しかったです。

　北国博物館ではアイヌ文化について学びました。アイヌ文化は、北海道の先住民であるアイヌ民族がつくった文化で、13 世紀から 14 世紀ごろに始まったといわれています。ぼくはその中でもアイヌ民族の家に注目しました。竪穴の住居から始まり、土間床の住居そして塚石の家、最後に布コンクリの家へと移り変わっていったことを知り、寒さと戦いながらたくさんの工夫をしていたことがすごいなと思いました。どんなときでもあきらめずに改良していく姿勢をぼくも見習っていきたいです。

　最後に、ぼくはこの小学生名寄自然体験交流学習を通して、名寄の自然や歴史を学べただけでなく、旭山動物園でグループのメンバーと話し合い、みんなの要望を取り入れながら行動するなどの経験ができてよかったです。ひとつ残念だったのは、今回は例年より寒くなかったことです。今度名寄に行けたら、とても寒い名寄を家族と一緒に体験したいです。





4班

学校名	高井戸小学校	氏　名	安藤　苺乃

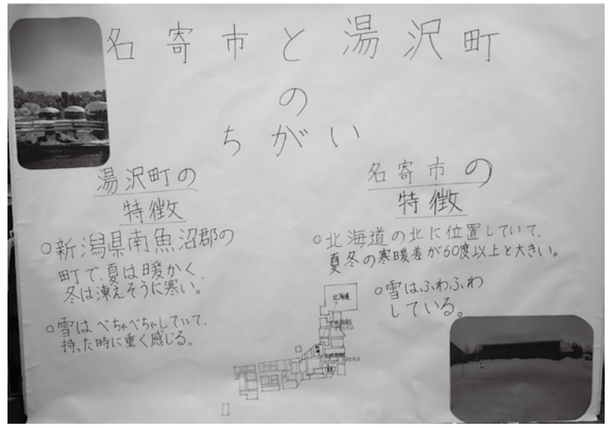
名寄市と湯沢町のちがい

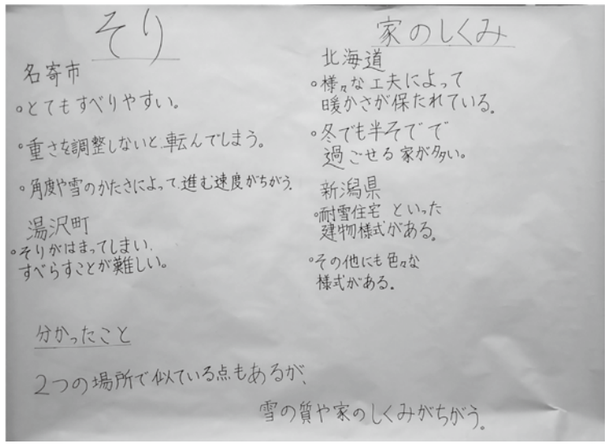
みなさんは雪国と言われるとどのようなイメージをしますか？私は毎年、家族で新潟県湯沢町に行っていますが、名寄市とのちがいが気になったので調べてみることにしました。名寄市につく前は自然の歴史を調べたかったのですが、残念ながら雪の関係で自然を観察することができなかったため、今回のテーマにしました。

まず、名寄市の特徴です。名寄市は北海道の北に位置しており、日本海側に属していることから、夏冬の寒暖の差が60度以上と大きく、降雨量も全道平均を下回っています。雪はさわってみると、ふわふわしていて、さわったことがない感覚でした。ものすごくつもっているところに行くと、ひざまでうもってしまいました。

次に湯沢町についてです。湯沢町は新潟県南魚沼郡の町で、夏は暖かく、冬は凍えそうに寒く、年間を通じてほぼ曇りです。さらに気温は－５℃から29℃に変化しますが、－９℃未満、または33℃をこえることは滅多にありません。雪はべちゃべちゃしていて、名寄に比べると持った時に少し重く感じます。

まず最初にそりですべってみました。名寄市の雪はとてもすべりやすく、逆に重さを調整しないと、転んでしまうぐらいとてもすべります。私はあまりの楽しさに３時間ほどすべり続けていました。角度や雪のかたさによって進む速度がちがったので、コツをつかむのには苦労しましたがとても楽しかったです。それに対し湯沢町の雪はべちゃべちゃしているため、そりがはまってしまい、すべらせることが難しかったです。





今回の調べで分かったことは、北海道にある名寄市と新潟県にある湯沢町では似ている部分もあるが、雪の質や家のしくみがちがうということが分かりました。北海道では寒暖差が60度以上あるので住むとしたら新潟県がいいなと思いました。ですが、名寄市にもたくさんのみりょくがあったのでぜひ行ってみて下さい！

4班

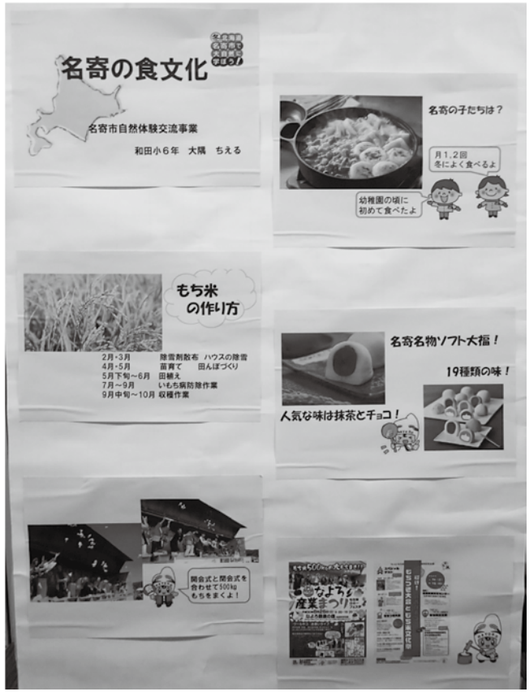
学校名	和田小学校	氏　名	大隅　ちえる

名寄の食文化

私は食べることが好きなので、名寄の美味しい食べ物を知り、みんなに伝えたいと思いこの食文化というテーマにしました。

名寄といえばソウルフードの煮込みジンギスカンや生産量日本一のもち米などが有名です。みなさんはどうしてジンギスカンが名寄では煮込まれているのか知っていますか？ジンギスカンといえば、羊肉を焼いて食べるのが定番ですが名寄市では肉をタレに漬け込みタレを沢山使うのが主流で、昭和30年頃から鍋にタレごと入れて煮込むのが一般家庭で普及していきました。北国博物館の館長さんや、交流で会った児童に初めて煮込みジンギスカンを食べたのはいつ？どのくらいの頻度で食べる？と聞いてみました。初めて食べたのは幼稚園、保育園の頃、どのくらいの頻度で食べるかは月1、2回という回答が多かったです。小さい頃から食べられていて家庭になじみのある料理だと思いました。私も夜ご飯に煮込みジンギスカンを食べました。お肉が煮込まれていて食べやすかったり、おもちが入っていて美味しかったです。鍋みたいで冬に食べたくなります。また、普通のジンギスカンを食べたことがないので、煮込みジンギスカンと比べて食べてみたいなと思いました。

次に「もち米」です。もち米はうるち米という私達がいつも食べているお米を品種改良してできた物なのです。市内で多く栽培されている品種は「はくちょうもち」このもち米は柔らかく硬くなりにくい特徴があります。その特徴を生かし、伊勢名物の「赤福」や「雪見大福」など色んなもち商品に使われています。私達は３日目にもち米の里☆なよろに行きお土産を買いました。まずお店に入ると、もち米と名寄名物「ソフト大福」が目につきました。大福は19種類もあり、どれを選ぼうか迷いました。たくさんの商品に使用されているもち米ですが、昭和36年から品種改良を始め、やっとのことで誕生しました。その道のりは、北限の稲作地帯という地理的な問題、苦労して収穫したお米への美味しくないという評価、そして減反政策などたくさんの問題がありました。しかし、そうした逆境から生まれたもち米は、今では街の象徴となり、現在は市内の水田のおよそ９割、東京ドーム589個分がもち米になっています。



そんなもち米をもっと広めるために市内で色んな取り組みが行われています。１月には、「新春なよろもちつき大会」名寄市民みんなでもちつきをして明るい１年の門出を祝います。８月は、「なよろ産業まつり～もち米日本一フェスタ～」開会式と閉会式でもちまきがあり、使われるもち米の量はなんと約500キロもあるそうです。また今度名寄に行くときは絶対にイベントに参加してみたいです。

私はこの交流事業で沢山のことを学びました。最初は初めて会う子達と名寄に行くことに緊張や不安があったけど事前学習会で交流を重ねるごとに仲良くなれて、当日は色んな体験をして名寄でも楽しく過ごせました。とても楽しかったです。ありがとうございました。

学校名	杉並第七小学校	氏　名	障子　菜々子

名寄市のもち米について

みなさん名寄市がもち米生産量日本一なのは知っていますか？私がこのテーマを選んだのは、先生が名寄のヒット商品としてすすめてくれたソフト大福がとてもやわらかくてびっくりしたからです。そして事前に配られた観光ガイドに名寄市は「もち米生産日本一」とあり調べてみたいと思ったからです。

名寄市のもち米生産量ですが、例えば平成28年の全北海道のもち米集荷数量31,338 t のうち約３割強が名寄市で生産されています。そして名寄市の水田のほとんどでもち米が栽培されています。

しかし名寄市は古くからもち米産地だったわけではありません。米栽培の厳しい気象条件のもとで栽培された北海道米は「不味い米」という評価を下され作る面積を減らす減反を余儀なくされ消費者からも敬遠され、道北部では、土地や技術があっても米を作らせてもらえない時期がありました。そんな時生産者達があつまり稲作研究会を発足。冷害時でも影響が少なく品質的にも他県に劣らないもち米に注目し昭和45年に生産組合を立ち上げました。そして昭和54年には、すべての水田をもち米に切り替え道内でもいち早く大区画化を進めたのです。そして国内初もち米専用施設として雪わらべ雪中蔵を導入。これにより年間を通してもち米の安定した流通が可能になり、この安定した品質の高さから全国的に有名な伊勢名物「赤福」の原料にも使われる様になりました。時間が経っても硬くなりにくいという特ちょうを持つ名寄産のもち米は株式会社もち米の里ふうれん特産館が主導しもち米商品としてソフト大福や本みりん「美凛」、もっちりいかめし、その他赤飯など数多くのもち米商品を作りあげました。

今では毎年開催され、もちつき名人を決める「もちつきチャンピオン決定戦」や「もち米サポーター養成塾」など、もち米について学び、一人でも多くの方に名寄のもち米に誇りと愛着を持ってもらう取り組みやイベントを開催しています。また、平成25年度には「もっともち米プロジェクト」を行なっています。私は、こうした名寄市のもち米を広げる取り組みの中で「もち米給食」に注目しました。名寄市の学校給食では赤飯やおこわ、もち粉パンといったもち米を活用した献立を積極的に取り入れています。私は、名寄市で２日目に食べたもち米おにぎりがとてもやわらかくてもちもちしておいしかったので、この取り組みを杉並区内の学校給食でも取り入れていけると思います。１つ目は、名寄市のもち米を杉並区の学校給食に取り入れる。２つ目は、もち米の文化として祝い事＝赤飯を献立に取り入れる。これにより、もち米を食べる機会を増やし、名寄市のもち米の良さを杉並区でも広げていけるといいのではないでしょうか？

学校名	八成小学校	氏　名	佐々木　隆之輔

アイヌの暮らしから学んだこと

二泊三日の名寄自然体験交流に参加して来ました。名寄は夏と冬の気温の差が60度あると聞いていたので、東京の寒さとの違いを体感できるのを楽しみにしていました。が、現地はそれほど寒くなく、雪質も少ししっとりしていました。それでも、雪を使ったアイスクリーム作り、スノートレッキング、名寄市の子との雪合戦やそりすべり、カーリングなど、いろいろな体験と遊びをすることができて良かったです。その中でも特に楽しかったのは、カーリングです。東京のアイススケート場でもカーリングができるようなので、やってみたいです。

北国博物館では、雪国の生活や文化、歴史について学びました。中でも特に興味深かったのは、アイヌの人々の暮らしや文化です。まず、アイヌの人々は主に狩りや漁、木の実の採取などをして暮らしていたようです。熊やシカ、サケなどを捕まえて鍋料理や干し肉にして食べていました。食器は最初は土器を使っていましたが、次第に本土と交易をするようになり和人（日本人）の漆器とアイヌのタカの羽とを交換して使っていました。他にも鉄製の刀なども和人から手に入れていたようです。次に、服装についてですが、彼らは木の繊維やわらを用いて生地を作り、服やくつ下にしていました。また、サケの皮でくつを作ったり、動物の毛皮を使って防寒着を作りました。捕食した動物をムダなく使っていたことがわかりました。

最後に、住まいについてですが、木やわらなどを使用し、アイヌ独特の作りの家を建てていました。家の中にはいろりがあり、室内をあたためるだけでなく、天井部分が格子状に組まれ、いろりの煙を干し肉を作る時に使っていたそうです。とても合理的な造りで、寒さに対応して生きられるようにできていたことがわかりました。

最後にまとめです。寒さの厳しい名寄の地で、アイヌの人々の生活は決して楽ではないことは想像していましたが、動物や魚、植物と共に生き、その恵みに感謝しながらムダにすることなく生活していたことを学びました。現在プラスチックゴミの問題や脱石油などとSDGsが盛んに言われるようになりましたが、現代人であるぼくたちも、ものを大切に使うことを意識すれば環境も守れるようになるんじゃないかと思いました。アイヌの人々の姿を見て、ぼくも普段から物を大切にするように心がけたいです。

また、2030年６月１日に北海道では金環日食を見られると聞いたので、今度は家族と一緒に北海道に行きたいと思います。

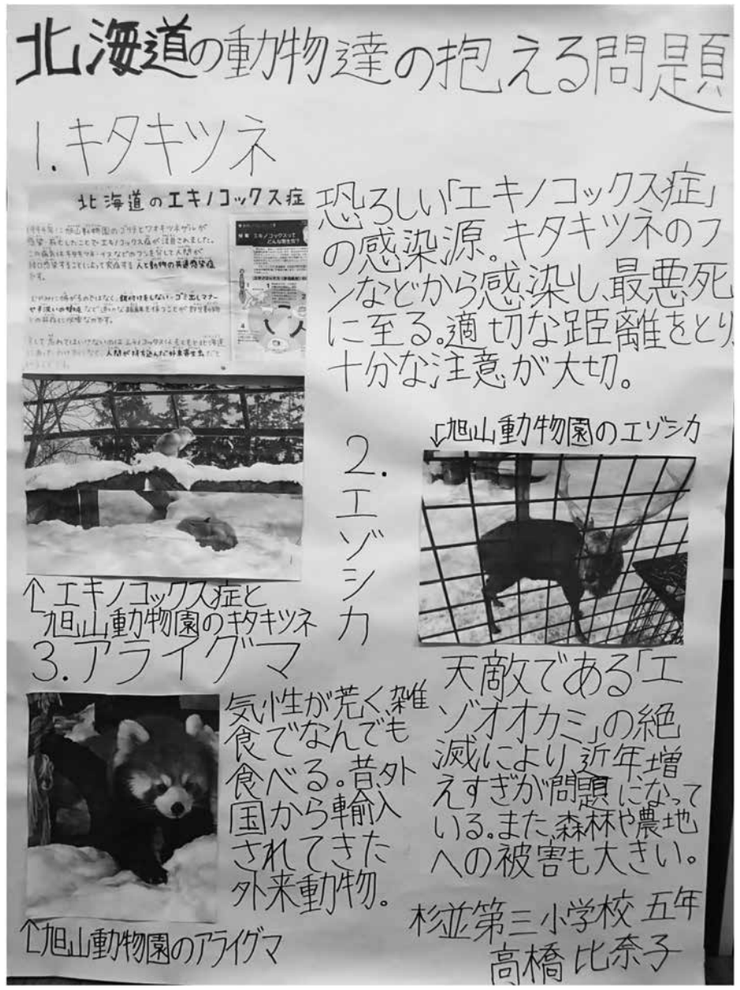
学校名	杉並第三小学校	氏　名	高橋　比奈子

北海道の動物達の抱える問題

私は、「北海道の動物の生態系」を学習課題として北海道に行ってきました。なぜ動物について調べてみようと思ったかというと、私はいわゆる本の虫で、たくさんの本を読んでいく中、北海道の自然の中で工夫をしながら生活する動物たちが書かれる本に出あうこともあり、東京という大都会に住んでいるのも相まって、北海道の自然に憧れを抱いたからです。しかし、そんな動物たちにも問題を抱える種が存在します。そこで、私が北海道に行って知った何種類かの動物たちの抱える問題について紹介します。

まず一匹目はキタキツネです。アカギツネの亜種で、北海道に生息しています。可愛らしい見た目のキタキツネですが、「エキノコックス症」の感染源でもあるのです。初期症状が現れてから半年ほど放置すると死に至る、恐ろしい病気です。ですがこのエキノコックス、実は、人間が外国からキツネを持ち込んだために、大流行してしまったのです。

二匹目は、エゾシカです。北海道に生息するニホンジカの亜種で、最近、増えすぎが問題になっています。その理由は主に、人々の乱獲や駆除による「エゾオオカミの絶滅」です。それにより、エゾオオカミを天敵としていたエゾシカが爆増してしまったのです。また、エゾシカは森林や農地に被害を及ぼすため、問題になっています。



三匹目は、アライグマです。ペットとして日本に輸入されるようになりましたが、気性が荒く、飼いきれなくなって捨てられたりするケースが続出。日本にはアライグマの天敵がいないため、野生化して繁殖し増加、雑食なため、北海道の固有種が減少したり、農作物が食べられてしまうなどの被害が深刻化しています。

これまで三匹の動物を紹介してきましたが、抱える問題はどれも私達人間の責任です。そして、解決する責任も私たち人間にあるのです。

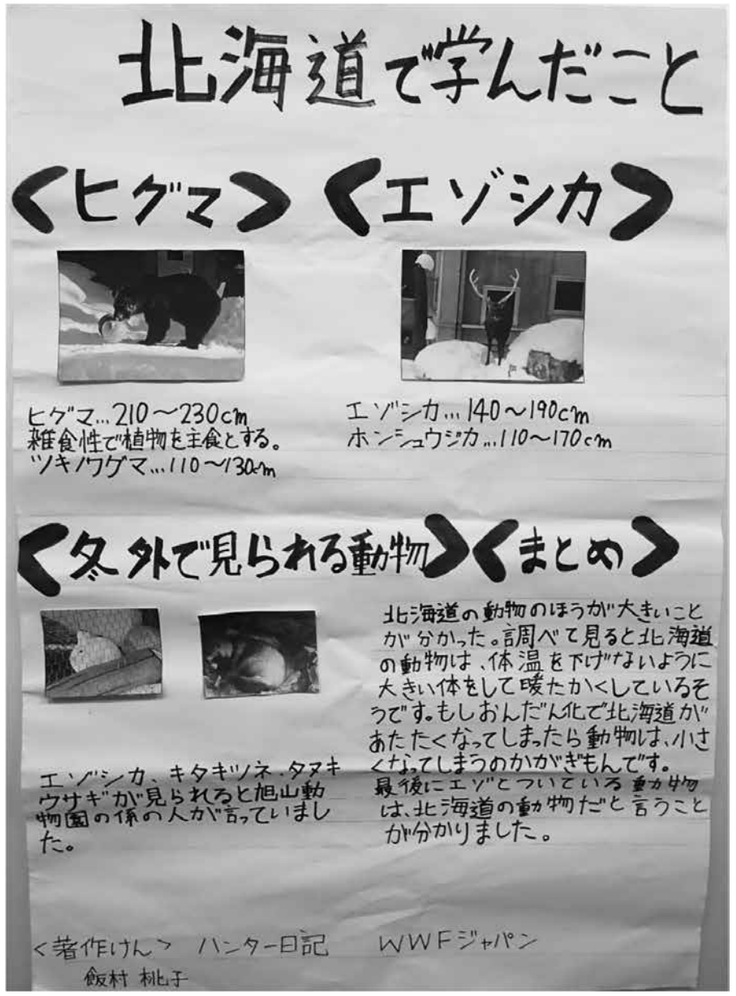
学校名	馬橋小学校	氏　名	飯村　桃子

北海道で学んだこと

私は、冬に見られる北海道特定の地域にだけ生息する固有の動物について調べて見ました。本の中で日本は、固有の種類がとても多いことを読んだことがあり、その中でも北海道は本土からもはなれていて、北海道独自の動物がたくさんいるのではないかと思ったからです。

北海道に行く前は、動物は、冬眠していて見られないと思っていました。北海道に行って見て私は、野生の動物に出会うことができませんでしたが「北国博物館」の館長や「旭山動物園」の係の人に冬に見られる動物を聞いてみると、エゾシカにキタキツネ、タヌキ、ウサギなどいっぱいの動物が見られると言うことが分かりました。今は、温だん化が進み本当は、12月マイナス20度からマイナス10度の気温は、0度マイナスにいかないことが増えたそうです。そのせいであたたかくなってしまい、冬眠から早く覚めてしまうとヒグマなどが出てくる事があると言うことを「きたすばる」の方から聞きました。

本州の熊と北海道の熊を比べるためにアイヌのカムイ（神）とも言えるヒグマとツキノワグマを比べて見ました。ツキノワグマは、平均的な個体で110センチから130センチです。ヒグマは、200センチから230センチでした。ツキノワグマよりヒグマのほうがすごく大きいことが分かりました。ほかにもエゾシカとホンシュウジカを比べました。エゾシカは、頭胴長140センチから190センチでホンシュウジカは、110センチから170センチでした。エゾシカのほうが大きいです。



ここから分かったことは、北海道の動物のほうが大きいことです。調べて見ると北海道の動物は体温を下げないように大きい体をしてあたたかくしているそうです。北海道に行っていろいろ知ることができました。固有の動物は、あまり見られなかったけれど、外にいる動物のこと、北海道の動物の方が大きいことが分かりました。

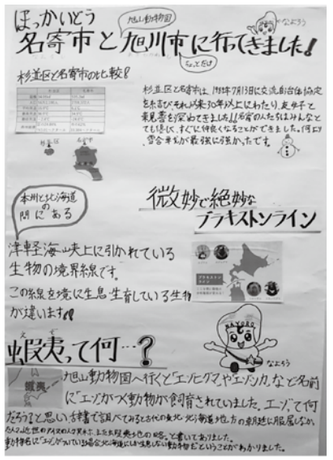
学校名	杉並和泉学園	氏　名	石井　寿

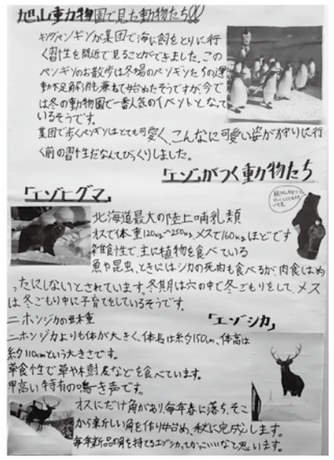
旭川動物園の動物たち

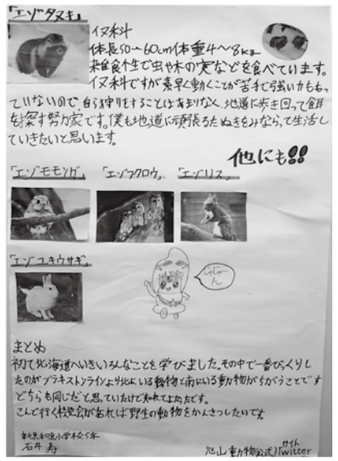
僕たちが過ごした名寄市から車で１時間半くらいのところに旭山動物園があります。旭山動物園に到着してすぐに見られたのが、ペンギンの散歩です。このペンギンの散歩は冬場のペンギンたちの運動不足解消も兼ねて始めたそうですが、今では冬の動物園で一番人気のイベントとなっているそうです。集団で歩くペンギンだちはとても可愛く、こんなに可愛い姿が狩りに行く前の習慣だなんてびっくりしました。

旭山動物園へ行き、色々な動物を見る中で北海道にしかいない動物について調べてみたいと思い、その中でも動物の名前に「エゾ」という名前がついている動物について調べることにしました。まず「蝦夷」を辞書で調べてみると動物の名前に「エゾ」がついている場合北海道にしか生息しない動物だということがわかりました。また、ブラキストンラインと呼ばれる境界線で本州と北海道の動物の種類が分かれていることがわかりました。ブラキストンラインとは本州と北海道の間にある津軽海峡上に引かれている生物の境界線でこの線を境に生息・生育している生物が違います。そのため、エゾがつく動物はブラキストンラインを南限としているため北海道にしか生息していません。旭山動物園では「エゾヒグマ」「エゾシカ」「エゾタヌキ」「エゾフクロウ」「エゾモモンガ」「エゾリス」「エゾユキウサギ」が飼育されていました。この動物たちの見た目の共通点はみんな体がたくさんの毛でおおわれていることです。やはり寒い地域に住んでいるので毛がたくさんあるんだと思います。

旭山動物園は僕がいままで行った動物園の中で一番自然に近いかんきょうで生活している動物たちを見ることができました。僕はたくさんの動物を間近で見ることができてうれしかったですがエゾのつく動物を調べていく中で北海道では野生のエゾシカやヒグマは農作物の被害や人との事故が原因で駆除されてしまうことも知りました。そこには沢山の問題があると思いますが、僕たち人間が野生動物との共存にもっと気を向け、心がけていくことで、森林破壊や動物が駆除や絶めつに怯えることなく、僕たち人間も動物との事故や被害に怯えることなく生活していけないかなと思いました。また北海道に行ける機会があったら、もう一度名寄市へ行き、野生の動物のかんさつをしたいです。







学校名	杉並第九小学校	氏　名	大澤　美空

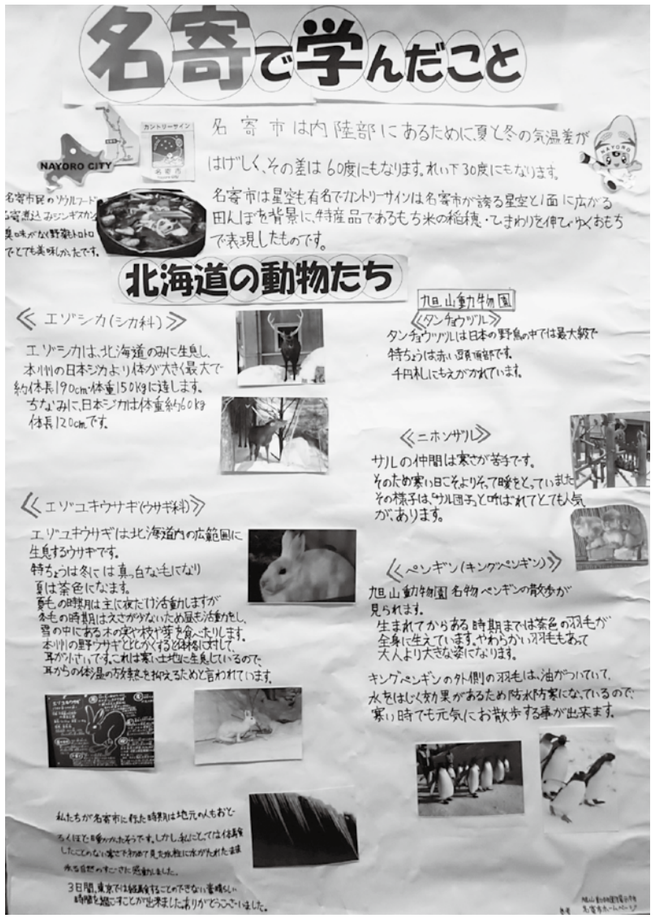
名寄で学んだこと

私達が名寄市に行った時期は、地元の人もおどろくほど暖かかったそうです。しかし、雪は、こし位まで積もっていて、私の体験した事のない寒さでした。私は、そんな寒さの中で暮らしている動物達について調べました。

１つ目は、エゾシカです。エゾシカは北海道のみ生息し、本州の日本ジカより倍近くの大きさがあり、旭山動物園で実際に見たエゾシカは思っていた以上に大きく迫力がありました。

２つ目は、エゾユキウサギです。エゾユキウサギの特ちょうは冬には真っ白な毛になり夏は茶色い毛になります。夏の毛の時期は主に夜だけ活動しますが、冬毛の時期はえさが少ないため昼も活動をし、雪の中にある木の実や枝や芽を食べたりします。本州の野ウサギと比かくすると体格に対して、耳が小さいです。これは寒い土地に生息しているので、耳からの体温の放熱を抑えるためだと言われています。

３つ目は、ペンギンです。旭山動物園で念願のペンギンの散歩が見られました。ペンギンは生まれてからある時期までは茶色の羽毛が全身に生えています。やわらかい羽毛もあって大人より大きな姿になります。キングペンギンの外側の羽毛は、油がついていて水をはじく効果があるため防水防寒になっているので、寒い時でも元気にお散歩する事が出来ます。



このように、気候が違うだけで体格差が出たり、寒さから身を守るために毛並を変える等新たな発見がありました。また、「エゾ」と言う古くから伝わる北海道を意味する言葉が動物達についていて、今でも伝わっている事に感動しました。

また、スノーシュートレッキングやカーリングを体験できました。スノーシュートレッキングでは、名寄市のお友達と交流することができ、雪合戦をしました。名寄市の子たちは雪になれているのでとても雪合戦が上手でした。カーリングではストーンが重く思うように飛ばず苦戦しましたが、どちらもとても楽しかったです。

今回参加して、最初は同じ学校の友達も居なくて、不安だったけれど交流事業でのいろいろな経験を通じてみんなとも仲よくなれ、名寄市にも友達が出来ました。このようなたくさんの経験が出来たのは、先生方や支えてくださった皆様のおかげです。すばらしい３日間をありがとうございました。

学校名	高円寺学園	氏　名	依田　杏里

北海道の冬ペンギン　羽毛のひみつ

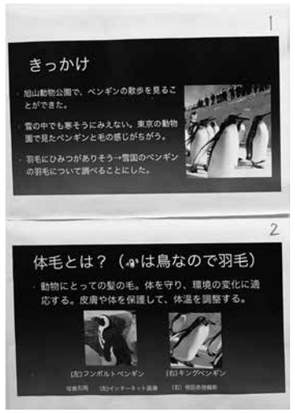
名寄自然交流の３日目、私は、旭山動物園で楽しみにしていたペンギンの散歩を見ることができました。雪の中でも寒そうではなく、東京の動物園で見たペンギンと見た目にも、ちがいがありました。それは、色と毛並みです。動物の毛は体毛と言いますが、ペンギンは鳥なので、羽毛です。そこで、私は雪国でで暮らすペンギンの羽毛について調べることにしました。

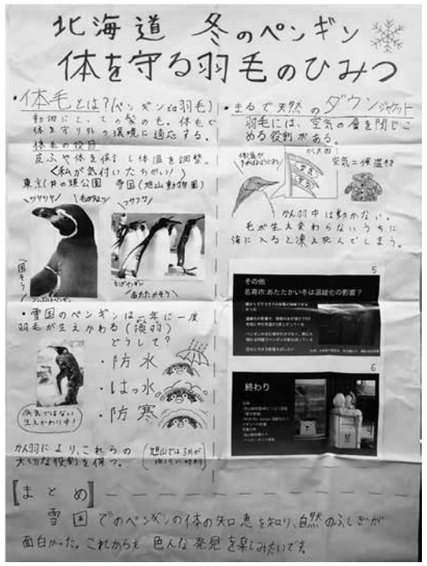
羽毛の役割は皮ふや体を保護して体温を調節することです。東京で見たペンギンはフンボルトペンギン。旭山動物園のペンギンはキングペンギンでした。雪国のペンギンは１年に１度羽毛が生え変わります。これを換羽といい、羽毛の防水、はっ水、防寒の働きを保てます。そのために寒さに強く元気に過ごせるということです。

人間で例えると、ダウンジャケットを着ているようなイメージです。羽毛には、空気の層を閉じ込める役割もあり､空気が保温材となります。生え変わりの時期にはエサを取らずにじっとしているそうです。その時に海に入ると、凍えて死んでしまうことをペンギンたちも知っているそうです。散歩をしているキングペンギンの写真を見ると、元気で生き生きとしていて、その理由が分かりました。

最後に、温だん化について、気付いたことです。私が名寄へ行った時、気温が高めでサラサラの雪が体験できなかったです。ペンギンについて調べている時、南極の温暖化というテーマもあり、住む場所やエサが減り、ペンギンの数も減っています。

今回、私は、ペンギンから生き物の、生きる知恵を知りました。これからも色いろなものにきょう味をもって、地球のためにできる節電や節水などを続けたいと思いました。





5班

令和４年度小学生名寄自然体験交流を振り返って

済美小学校　校長　難波　誠二

11 回目を迎えた令和４年度の名寄自然体験交流は昨年から派遣児童を 10 名増やしコロナ禍以前と同じ 25 名で結団式を迎えました。区内 18 校から集まった５・６年生の子供たちは、初めて会う者同士緊張していましたが、事前学習の回を重ねるたびに打ち解け合う様子が見られました。特に２回目に行った名寄市とのインターネット交流では、名寄市の子供たちと「ご当地クイズ」で盛り上がり、まだ見ぬ名寄の地への期待を膨らませていました。

令和４年 12 月 24 日、待ちに待った派遣当日を迎えました。できることなら 25 名全員が揃って出発式を迎えたかったのですが、事前の PCR 検査の結果や当日の体調不良により３名の派遣児童が参加できなくなったことは大変残念でした。出発式を終えた派遣児童 22 名は羽田空港より１時間半のフライトで旭川空港へ着き、バスに乗り換え一路名寄市へ向かいます。旭川の市街地を抜けると車窓からは野山一面の銀世界が広がり子供たちの歓声が上がります。さすが北海道という圧巻の雪景色でした。名寄の日没はあっという間です。森の休暇村コテージに到着する頃にはあたりはすっかり夕闇に包まれていました。休暇村管理人の星野様によると今年の冬は異常気象で通常なら－10℃が当たり前ですが、今年は寒くてもまだ－2､3℃とのこと、温暖化の影響がこんなところにも出ていることに驚かされました。その後、「きたすばる」天文台では事前学習の交流会でもお世話になった村上台長様から国内２番目の大きさを誇るピリカ望遠鏡の説明を受けました。期待された天体観測はあいにくの曇り空でしたが、みんなの願いが通じわずかに覗いた雲の切れ間から木星とその衛星の観察をすることができ、子供たちは大喜びでした。第一日目の夜はクリスマスイブの夜ということで、夕食後には對馬委員によるクリスマスのお話会があり、夜のコテージにはサンタとトナカイが各部屋に訪れお菓子のプレゼントを渡すサプライズもありました。子供たちは東京では味わえないホワイトクリスマスを経験することができたと思います。

２日目は、晴れ間も見える天気となり、楽しみな北国博物館の見学と名寄の子供たちとの交流会が行われました。博物館には加藤市長様、岸教育長様もご来館くださり、私たち派遣団を歓迎していただきました。また、金田館長様はじめスタッフの皆様には丁寧に館内を案内していただき、北国の暮らしの歴史と人々の知恵を学ぶことができました。その後のスノーシュートレッキングは気温の高さで樹木からの落雪の危険があり林の中に入ることはできませんでしたが、真っ白な雪原でのトレッキングや宝探し、例年の粉雪ではできなかった雪合戦やかまくら作りも体験でき、名寄の子供たちと思う存分雪遊びを楽しむことができました。北国博物館を去る際に名寄の子供たちが雪原を走りながらバスを追いかけ手を振ってくれたことが交流が深まったことをよく表してくれています。カーリング体験も子供たちにとって貴重な体験になったようです。見るのとやるのとでは大違い、その難しさと面白さを十分に満喫しました。

３日目は、旭山動物園の見学です。この日も例年にない暖かさで気温は ＋1℃ 、班の仲間と考えた計画に沿って雪の中の動物園を楽しみました。東京に戻り役所へ向かうバスの中では、子供たちの会話が途切れることなく盛り上がり、３日間同じ時を過ごした仲間との交流の深まりが伝わってきました。

そして、２月４日には、２年ぶりに学習成果発表会が開かれました。一人ひとりが３日間見て体験し感じたことを自分らしく伝える姿は、この３か月間の成長を感じるものでした。多くの人へ伝えることでさらに学びを深めていたようです。

結びになりますが、名寄市および名寄市教育委員会の皆様、そして本事業の趣旨に賛同し、ご協力いただきました皆様に、心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

保護者の感想

目を輝かせて全ての体験を話してくれました。初めてのことが多かった様で、全ての行事にとても感動していました。家族とでは体験する事が出来ないすばらしい経験をありがとうございました。

自然体験ができる様々なプログラムが用意されていて、東京では絶対に得られない貴重な体験ができたと強く感じた。気候、食文化、歴史、動物など子どもの好奇心をかき立てるものばかりで、帰ってきた子どもが成長したように感じた。

新しい環境に馴染む事や見知らぬ人とコミュニケーションを取る事が苦手な娘なので心配していましたが、楽しかった！！！と見て感じて学んで来た事をいきいきと話してくれる姿に感激致しました。娘は間違いなく成長して帰って参りました。

新しい友人ができ東京では体験できない活動ができ、満足していました。未知なものへの探求を楽しむきっかけになったと思います。

令和４年度名寄市・杉並区交流事業

事業名	概要	時期
なよろひまわり写真展	名寄市で撮影したひまわりの写真を杉並区役所にて展示しました。	５月30日～６月３日
アスパラまつり	杉並区役所でアスパラガスや大福等の特産品を販売しました。	６月１日～３日
地域区民センターにおけるひまわり展示	名寄市の夏の風物詩であるひまわりを紹介するパネルと生花を地域区民センターにて展示しました。	６月14日～21日
白樺まつり	東京高円寺阿波おどり親善訪問おどり団（31名）と区代表団（５名）が名寄市を訪問し、まつり会場で踊りを披露しました。	６月18日～19日
杉並区・名寄市子ども交流会	夏休みに、両自治体の小学４年生から６年生が、相互に訪問し交流します。	名寄編 ７月28日～31日 杉並編 ８月５日～８日
北海道名寄市一足早い秋の収穫祭	杉並区役所でとうもろこし（ゴールドラッシュ）や大福等の特産品を販売しました。	９月１日～２日
すぎなみフェスタ	交流自治体合同物産展に出展し、大福等の物産販売を行いました。また、会場内でもちつき体験を実施しました。	11月５日～６日
冬のなよろ写真展	名寄市にて作成している冬カレンダーの掲載作品および応募作品の一部を杉並区役所にて展示しました。	12月21日～23日
なよろ雪質日本一フェスティバル	杉並区代表団６名が名寄市を訪問し、雪像コンクールにて区長賞・議長賞の表彰をしました。	２月11日～12日
名寄市写真展 玉川太福が唸った！ 名寄の銀世界	もちを連想させる名前を持つ浪曲師 玉川太福（たいふく）さんがもち米生産量日本一の名寄市に行って体験した観光アトラクション等を紹介する写真展を開催しました。	３月20日～31日

令和４年度
小学生名寄自然体験交流事業報告書
令和５年３月発行
編集・発行　杉並区教育委員会事務局生涯学習推進課
〒166－8570　杉並区阿佐谷南１－15－１
☎ 03－3312－2111（代表）
☆杉並区のホームページでご覧になれます。https://www.city.suginami.tokyo.jp

登録印刷物番号
04 － 0101

北海道名寄市のご案内

北海道の北に位置する名寄市は、天塩川と名寄川が豊かな恵みをもたらし、もち米やアスパラガス等の収穫量を誇る、農業を基幹産業とする都市です。夏と冬の寒暖差が最大で60℃にもなり、日本最大級の望遠鏡を持つ市立天文台「きたすばる」や、雪質日本一ともいわれるスキー場などがあります。

杉並区と名寄市の交流は、平成元年７月に旧風連町と交流自治体協定を結んだことに始まります。その後区民を中心とした幅広い交流が続いてきましたが、平成18年３月には旧風連町と旧名寄市とが合併し、新しい名寄市としてスタートを切りました。杉並区と新名寄市は、これまで築いてきた両自治体の関係をさらに発展させていくため、平成18年６月に協定を再締結し、より一層の交流を深めています。

北国の春を彩る芝桜

夏のひまわり畑

名寄市のデータ

面　積　535.20㎢
（杉並区　34.06㎢）
人　口　26,000人
世帯数　14,171世帯
（令和５年1月末現在）

日本一のもち米を作る稲穂

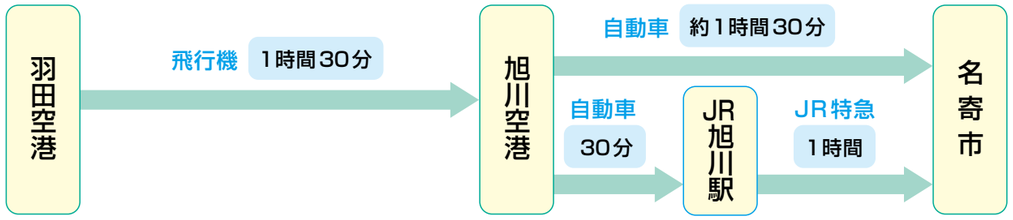
名寄市
観光キャラクター
「なよろう」

雪質日本一！ピヤシリスキー場

なよろ市立天文台 きたすばる

神秘的なサンピラー現象

名寄市へのアクセス



「小学生名寄自然体験交流事業」は杉並区次世代育成基金を活用しています

杉並区次世代育成基金は、次代を担う子どもたちが、自然・文化・スポーツなどさまざまな分野における体験・交流事業への参加を通して、視野を広げ、将来の夢に向かって健やかに成長できるように支援するための杉並区独自の仕組みです。

平成24年度の創設より、寄附者の皆さまからの継続的なご支援をいただくことで、多くの子どもたちに貴重な体験を提供することができています。寄附者の思いが基金を通じて子どもに託され、その子どもたちが大人になり、さらに次の世代を育んでいく。

この「支援の循環」が杉並に根付き、希望に満ち溢れた未来へとつながるよう、一人でも多くの皆様のご支援をお願いいたします。

区主催のイベントや次世代育成基金活用事業の報告会などで募金活動を行っています。杉並区次世代育成基金の詳細については、杉並区ホームページ（下記QRコード）をご確認ください。

子どもたちの夢を応援する
杉並区次世代育成基金へのご寄附をお願いします。

［お問い合わせ］
杉並区児童青少年課　TEL：03－3393－4760　mail：jisedai-ikusei@city.suginami.lg.jp